

富山県福光町

在 房 遺 跡 II

2002年3月

福光町教育委員会

序

福光町の東部に位置する北山田地区は、山田川と大井川にはさまれた水田地帯であります。近年の発掘調査等で、縄文時代から近世までの様々な遺跡が発見され、多くの歴史的遺産が埋蔵されていることが分かりました。

今回の調査は、県営ほ場整備事業(北山田北部地区)の実施に伴う在房遺跡の発掘調査です。遺跡の大半は盛土により保存し、一部の用排水路用地や田面削平部分について本調査を実施することになりました。

今年度の調査の結果、古墳時代末から平安時代にかけて流れていた流路や平安時代末の掘立柱建物、祭祀を行った土坑などが見つかりました。また、それらの構造に伴って、土師器、須恵器、珠洲などの遺物が出土しました。本書は、その調査の成果をまとめたものです。郷土の歴史の解明や学術研究等に活用していただければ幸いです。

終わりに、この調査の実施にあたり、富山県埋蔵文化財センター、福光町シルバー人材センター、富山県農林水産部、ほ場整備事業北山田北部地区委員会をはじめ、地元住民の方々に多大な御協力を賜りましたことに、深く感謝を申し上げます。

平成14年3月

福光町教育委員会

教育長 石崎栄一

例　　言

1. 本書は、県営は場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う富山県福光町在房遺跡の発掘調査概要である。
2. 調査は、平成13年6月19日から同年7月18日までである。調査面積は305m²である。調査は、富山県農林水産部の委託を受け、福光町教育委員会が実施した。地元負担金については、福光町教育委員会が国庫補助金・県費補助金を受けた。
3. 調査事務局は福光町教育委員会生涯学習課におき、指導文化係長 石黒久尚、指導文化係主事 片田亜紀が調査事務を担当し、生涯学習課長 中島英二が総括した。調査の担当及び本書の執筆は、生涯学習課指導文化係主事 片田亜紀が行った。
4. 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々の協力・助言があった。記して謝意を表する。
越前慶祐・太崎勇・南保久夫・林敏三・堀田博・水口吉則・宮田進一・山田祐義（敬称略・五十音順）
5. 本書で使用した方位は真北である。土層の観察には、小出正忠・竹原秀雄編著1967「新版標準土色帖」日本色研事業株式会社を用いた。
6. 調査参加者は次の通りである。
井口富士雄・井口義雄・河合弘・河合文一・水口良男・山田善之
井口艶子・大島笑子・川島芳江・大門そと・水口貞子・水口浜子（現地作業員）
木戸一代・西川和美（遺物整理作業）

目　　次

I 位置と環境	1	参考文献	6
第1図 位置と周辺の遺跡	1	第5図 3地区遺構配置図	7
II 調査に至る経緯と経過	2	第6図 3地区的遺構(1)	9
第1表 遺跡の概要	2	第7図 3地区的遺構(2)	10
第2図 遺跡範囲と調査区位置図	3	第8図 3地区的遺物(1)	11
III 調査の概要	4	第9図 3地区的遺物(2)	12
1 調査の方法	4	図版1 3地区的遺構(1)	
第3図 地形と調査地区割	4	図版2 3地区的遺構(2)	
2 3地区的概要	5	図版3 3地区的遺物(1)	
第4図 基本層序図	5	図版4 3地区的遺物(2)	
IV まとめ	6	報告書抄録	

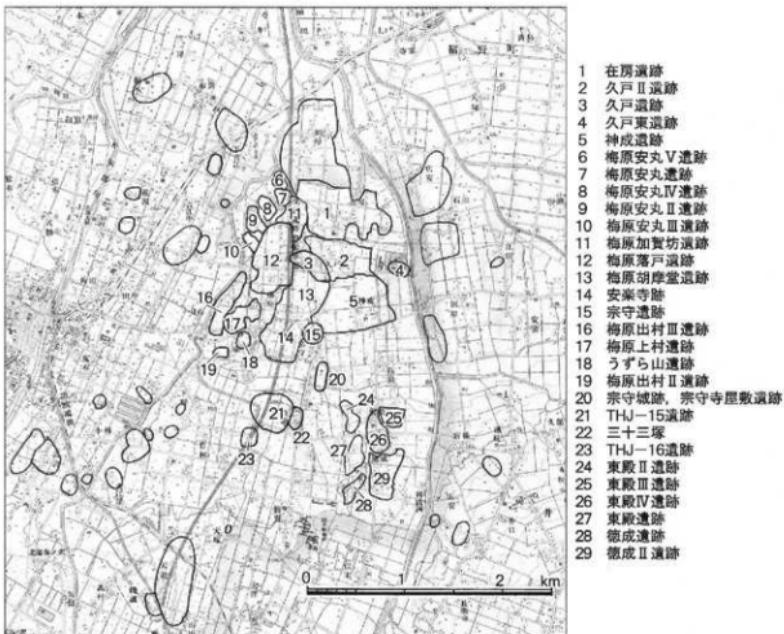
I 位置と環境

富山県福光町は、石川県金沢市との国境をなす富山県の西南部端に位置する。町の西側から南側にかけては、養老三年（719年）、泰澄大師によって開山されたと言われる笠峰医王山をはじめとする山脈が連なる。町の南側に位置する上平村との境にある大門山に源を発する小矢部川が、その支流とともに平野部を形成する。市街地は主に小矢部川沿いに展開し、小矢部川とその支流である山田川にはさまれた段丘には小河川が縦横に走り、それらを利用した田地が広がる。

在房遺跡は山田川左岸の緩やかな傾斜を持つ洪積台地上の高宮田尻面に位置し、行政区画上では福野町との境界に接する【金田草谷「医王は語る」】。現況は主に田地・畑地である。山田川を隔て、砺波平野を一望できる微高地に立地し、台地末端から河川域までの比高差は2m前後を測る。

周辺には、久戸遺跡、久戸II遺跡、神成遺跡、梅原加賀坊遺跡、梅原安丸遺跡群などの遺跡が密集しており、近年の調査で、古墳時代・奈良・平安時代の住居跡や中世の建物跡が数多く発見されている。また墨書き器や製塩土器なども出土しており、北山田地区一帯では古くから大規模な集落が営まれていたことがわかる。

文献資料では、福光町の一部が砺波川上郷に含まれていたとされている。平安時代には川上村と呼ばれ官倉が置かれていたことが知られる。その後11世紀には円宗寺領石黒庄が成立し、当地域はそのうちの山田郷の一部に比定される。



第1図 位置と周辺の遺跡 (S=1:50,000)

II 調査に至る経緯と経過

平成10年(1998年)、福光町北山田北部地区において、県営は場整備事業(扱い手育成型)が策定された。この事業は農地を扱い手に集積し、経営規模を拡大させることにより低コスト化を目指すものであり、田の大区画による基盤整備を行うものである。事業計画は在房、久戸、神成、宗守の約100haを対象とし、平成10年度から平成14年度までが工期とされていた。これに先立ち平成8年度に、町教委員会は県埋蔵文化財センターの職員の派遣を受けて、事業計画地内で遺跡分布調査を行ったところ、広範囲において遺物の散布地を確認した。そのため、平成10年度からは国庫補助金を受けて遺跡の範囲確認を行いうため試掘調査を実施した。試掘調査の結果、遺跡が広範囲に渡って遺存していることが確認されたため、県農地林務部、県教育委員会、地元土地改良区と遺跡の保護措置について協議を重ねた。その結果、遺跡の大半は盛土を行うことで水田下に保存し、一部の面工事・農道建設・排水路部分のような遺跡が保存できない場所について本調査を実施することになった。以降、試掘調査を毎年度継続して行い、平成12年度からは並行して本調査を行っている。

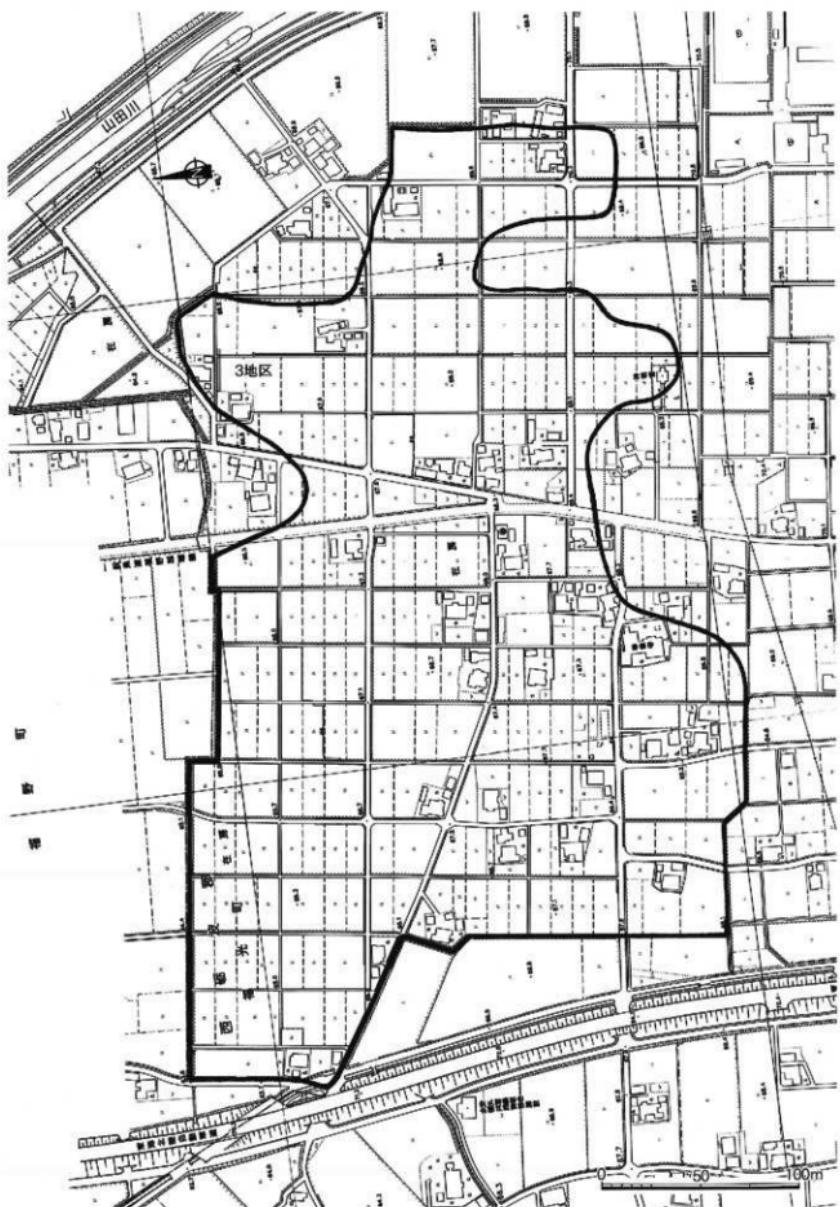
平成13年度の調査は3地区の約305m²である。3地区は在房遺跡の北東端に位置し、農道の敷設により削平を受けるため本調査対象となった。

北山田北部地区に所在する遺跡の、これまでの調査面積は次のとおりである。

	遺跡名	試掘調査面積	本調査面積
平成10年度	在房遺跡	約 6.0 ha	
平成11年度	在房遺跡	約 24.3 ha	
	久戸Ⅱ遺跡	約 9.4 ha	
平成12年度	在房遺跡	約 6.1 ha	3,175m ²
	久戸遺跡	約 6.0 ha	
	久戸Ⅱ遺跡	約 3.8 ha	
	神成遺跡	約 9.3 ha	
平成13年度	在房遺跡		305m ²
	神成遺跡	約 18.3 ha	
	久戸Ⅱ遺跡	約 0.6 ha	

第1表 遺跡の概要

遺跡名	所属時代	発見された遺構	発見された遺物
在房遺跡	縄文時代晩期、古墳時代、古代、中世	竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、井戸、柱穴	縄文土器、須恵器、土師器、製塗土器、中世土師器、珠洲、青磁、白磁、木製品、纺錦車
久戸遺跡	縄文時代、中世	柱穴、土坑、溝	縄文土器、須恵器、上師器、珠洲、瀬戸、青磁、白磁、肥前系陶磁器
久戸Ⅱ遺跡	弥生時代、古墳時代、古代、中世	竪穴住居?、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴	弥生土器、須恵器、土師器、硯、中世土師器、珠洲、木製品
久戸東遺跡	中世	なし	なし
神成遺跡	古代	土坑、柱穴、溝	須恵器、土師器



第2図 遺跡範囲と調査区位置図 (S=1 : 5,000)

III 調査の概要

1. 調査の方法

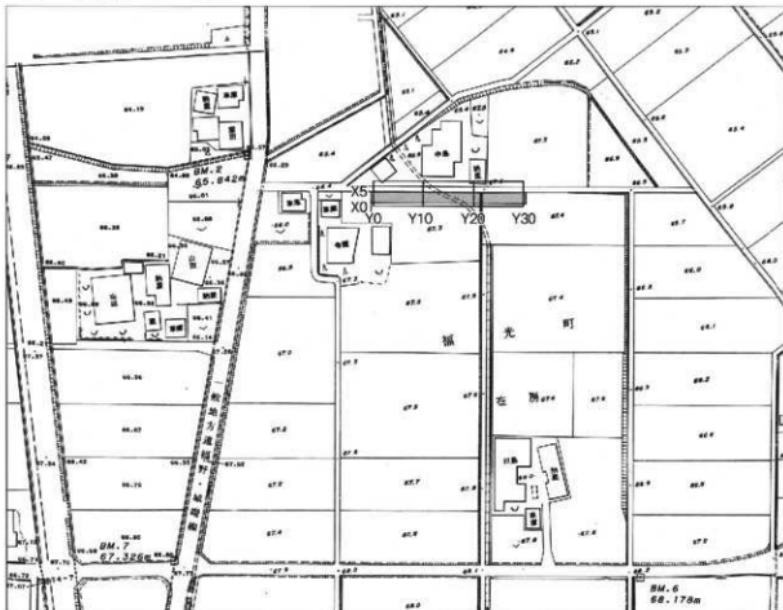
調査区域の設定後、試掘調査の結果にもとづき、調査員の立ち会いのもとで表土除去を行った。表土除去には重機を使用し、耕作土および前回は場整備時の盛土の層まで掘削した。耕作土は、盛土と分けて調査区の南側に搬出した。

表土除去後、調査区に合わせたおおよその東西、南北方向に基準杭を設置して調査区割りを行った。区割りは、南から北にX軸、西から東にY軸とし、2mを一区画としてアラビア数字で表記した。

調査区割に合わせて、10m毎にサブトレンチを設定し、地表面まで掘り下げて層位を観察した。その後、杭を中心にしてセクションベルトを廻して層位を確認しながら、人力による包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。遺構の掘削は、埋土の堆積状況を観察するために半載するか、セクションベルトを2本ないし3本残して掘削し、土層の記録作業が終りしだい完掘した。耕土は、人力により調査区外へ搬出した。近代の用水跡はトレンチ掘削により、用水の埋土下に遺物包含層、遺構が遺存していないことを確認した。

遺構は検出後、1:100で概略図を作成し、遺構毎に通し番号をつけた。遺構の検出状況や土層、遺物の出土状況は、調査員と調査補助員が手実測により1:20あるいは1:10で図化した。各遺構の検出状況、断面、完掘状況などの記録写真、調査区のブロック写真、全体写真は調査員が撮影した。撮影終了後、調査員及び調査補助員で調査区全体の図化を1:20で行い、あわせてレベル落としを行った。

出土遺物は、現地作業と並行して洗浄・バインダー処理・注記・仕分けの整理作業を行った。接合、復元は現作業中止時や、現場終了後に行った。遺物実測やトレース等は基準を統一し、調査員と整理員で図版を作成した。写真や図面は年度・遺跡・地区毎にファイルにまとめ、出土遺物は報告書の写真図版のとおりに整理箱に収めた。またそれ以外の遺物は地区的遺構毎、グリッド毎にならべて整理箱に収めた。

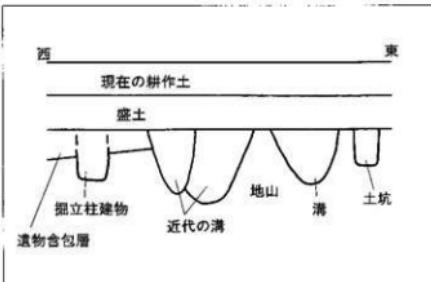


第3図 地形と調査区割 (S=1:2,000)

2. 3 地区の概要

(1) 地形と基本層序 (第4図)

3地区は山田川左岸の下位段丘の先端部近くに位置し、周囲との比高差は約2mにおよぶ。海拔は約66.8~67.2mを測り、地形は南西から北東側に緩やかに傾斜している。地表から地表面までは約20~40cmであり、現在の耕作土、前回は場整備時の盛上(茶褐色粘質土)、遺物包含層(黒褐色粘質土)、地山(黄褐色粘質土)の順に堆積している。遺物包含層から古代の遺物が出土しているが、調査区のY11列以西にのみ堆積しており、調査区の東側は削平を受けている。



第4図 3地区基本層序

(2) 遺構の概要

溝3、掘立柱建物1、土坑4、柱穴がある。

SD01(第6図、図版2)

調査区の東側、X1~2、Y23~26付近に位置する。幅は約9m、深さは約1.1mを測る。昨年度調査を行った1地区のS D01と同じ自然流路である。埋土は大きく、I層：黒色粘質土、II層：黒褐色粘質土、III層：黒色シルト+地山、IV層：黒色砂まじりシルト、の4つに分けられる。出土遺物には、土師器・把手付甕(7)、須恵器・杯(5)、須恵器・蓋(1~3)などがある。またII層から磨耗した土師器の小破片が多く出土している。時期は7世紀~8世紀のものが多い。

SD02(第6図、図版2)

調査区の西寄り、X1~2、Y8付近に位置する。幅は約90cm、深さ約50cmを測る。埋土は黒褐色土を中心にして4層に分層でき、特に下層では砂質土が混じる。遺物は出土していない。昨年度の調査で検出した溝と同様に区画を形成する溝と思われる。溝の北側は近代の用排水跡に切られている。

SD03(第6図、図版2)

調査区の中央よりも東寄り、X1~2、Y21付近に位置する。幅約1m、深さは約10cmである。かなりの削平を受けしており、溝の底部しか遺存していない。埋土は黒褐色土である。この溝の底から挙火の櫛を多く検出した。遺物は須恵器の杯(8)、甕(10)、土師器・壺(11、12)が出土している。

S B01(第7図、図版2)

調査区の西側、X1、Y1~2付近に位置する。柱穴列のほとんどが調査区外に延びているため、建物の規模は不明である。柱穴は直径約50cmの隅丸方形を呈し、柱痕が確認できる。埋土は、地山が混じる黒色粘質土が中心で、柱痕は主に黒褐色土である。柱間は東西方向で2.2m、南北方向で2.5mである。

S X01(第7図、図版1・2)

調査区の東側、X1、Y28付近に位置する。昨年度の1地区の調査で検出したS X01、S X02と同様の土器埋納土坑である。直径約1mの円形を呈する。削平を受けているため、深さは約10cmである。埋納されている土器は、完形もしくは完形に近いクロロ土師器の甕7(23~34)・小皿12(34~41)、あわせて19枚である。土器はほとんどが正位の状態で出土している。埋納は、意図的に甕と皿を分けたり、数枚単位で土器を重ねたりはしていないようである。昨年度の調査で、甕・皿あわせて65枚が出土した土器埋納土坑と近接している。

(3) 遺物の概要

出土遺物には、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲がある。

SD01 (第8図、図版3)

1～3は須恵器・蓋である。1・3の口径は約12.0cmであり、頂部はヘラ切り後ナデ調整を施す。2の口径は約21.0cmである。4は須恵器・蓋の体部である。内外面ともにナデ調整を施す。5は須恵器・杯であり、口径は10.6cm、器高は2.9cmである。体部外面にヘラ記号がある。6は土師器・壺の口縁部である。7は土師器・把手付壺の把手部分である。外面にハケメ調整を施しているが、使用による摩滅が著しい。

SD03 (第8図、図版3)

8は須恵器・杯である。口径12.6cm、器高3.3cmを測る。9は須恵器・杯Bである。10は須恵器・壺の底部である。外面に叩き目を施し、内面には同心円状の当て具痕が残る。12は土師器・壺の口縁部である。口径は約20cmである。

包含層 (第8図、図版3)

13は須恵器・蓋である。口径は12.4cmを測る。14は須恵器・杯Bの底部である。15は土師器・椀の底部である。底部に糸切り痕が確認できる。16は土師器・椀の底部である。17は土師器・皿である。口径8.6cm、器高は1.9cmであり、底部に糸切り痕が見られる。18は土師器・皿である。19は須恵器・短頸壺の口縁部である。口径は11.0cmを測る。20は須恵器・壺の口縁部である。21は珠洲・描鉢である。22は土師器・椀であり、口径は16.0cmを測る。

SX01 (第9図、図版4)

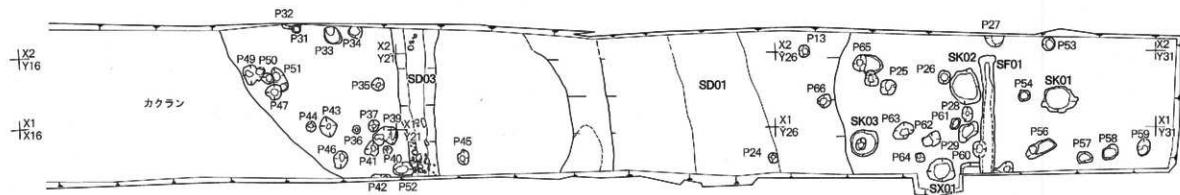
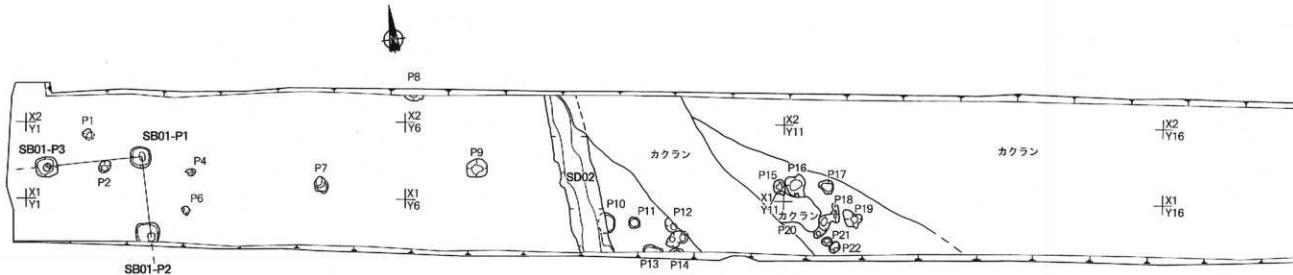
23～34はクロコ土師器・小皿である。口径は8.5cm～9.0cm、器高1.6～2.0cmのものが多い。直線的に立ちあがり途中で屈曲するもの・内湾するものに大別できる。35～41は土師器・椀である。体部の途中で屈曲するもの・途中で屈曲し、口縁部が外反するものに大別できる。

IV まとめ

1. 今回調査した3地区は、平成12年度調査の1地区と近接しており、関連のある遺構を多く検出した。調査区両端でも掘立柱建物を検出しておらず、土器祭祀を行っている屋敷地が広範囲におよぶことがわかる。
2. 今年度の調査区では西側よりも東側で、遺構の密度が高く、遺物出土量も多かった。このことや、昨年度調査の結果から、3地区の南東側のに7世紀前半、9世紀代、12世紀前半の集落が広がっていることが予想できる。

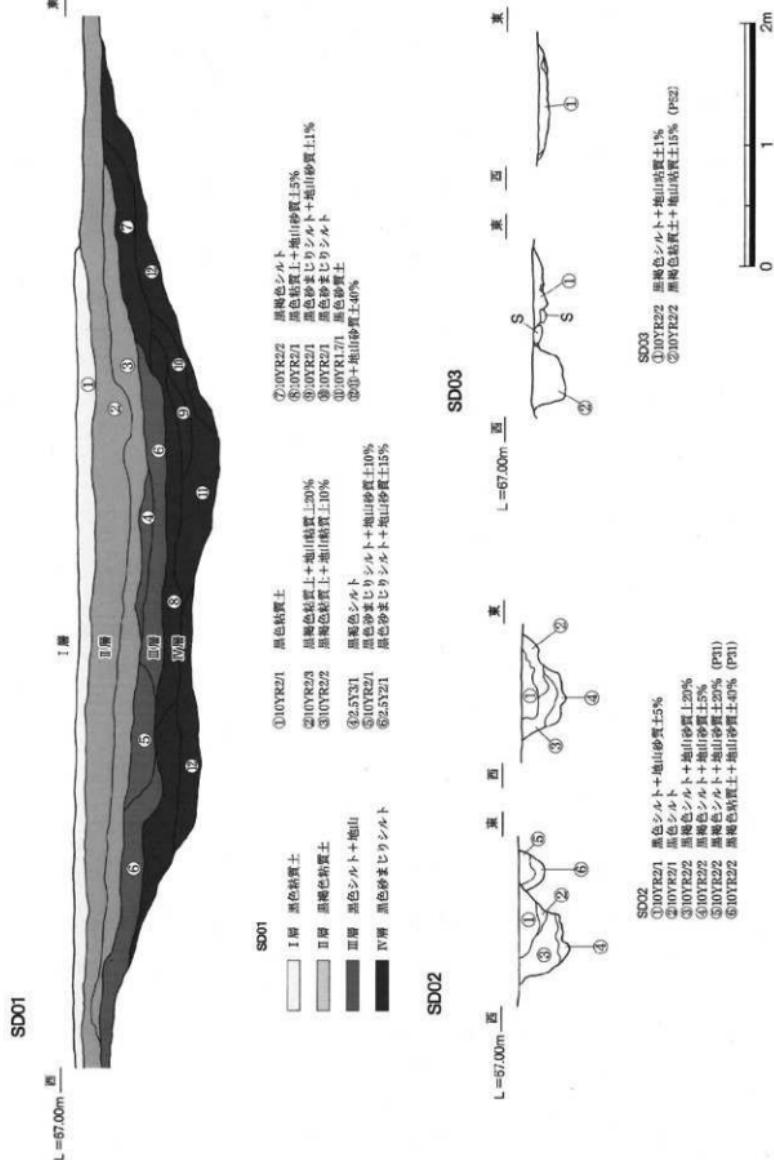
参考文献

- 内田亜希子1997「越中における古代土師器の編年予察」「埋蔵文化財調査概要－平成8年度－」
財団法人 富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
宇野隆夫1989『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社
宇野隆夫1991『律令社会の考古学的研究』桂書房
山海堂1995『技術者のための地形学入門 研究第3分』
福光町教育委員会1999『梅原胡摩堂遺跡Ⅲ 梅原山村遺跡群Ⅲ』
福光町教育委員会2001『成徳Ⅱ遺跡Ⅰ』
福光町教育委員会2001『在房遺跡Ⅰ』
舟橋村教育委員会2000『蒲田遺跡発掘調査報告(3)』
北陸古代土器研究会1995『北陸古代土器研究第5号』
北陸古代土器研究会1997『北陸古代土器研究第7号』
吉岡康暢1991『日本海域の土器・陶磁 [古代編]』六興出版

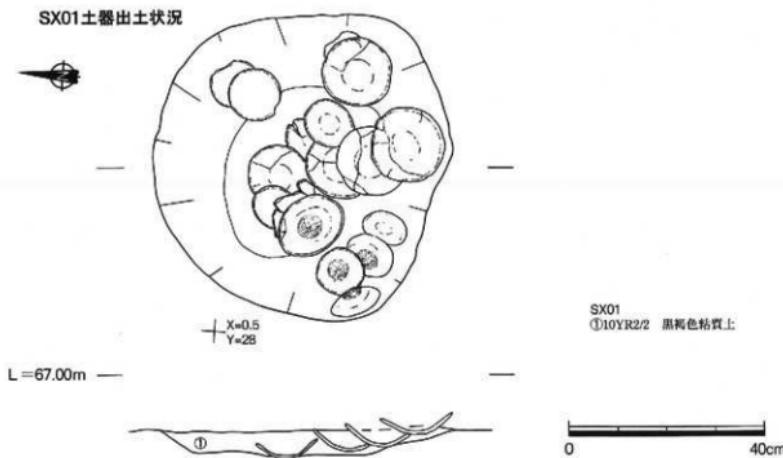
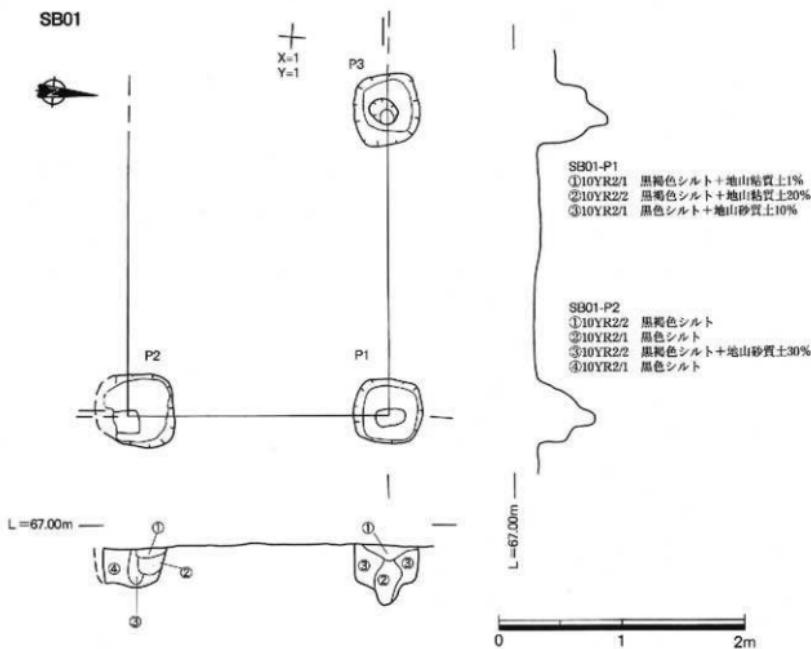


第5図 3地区造構配置図 (S=1:100)

0 1 5 10m

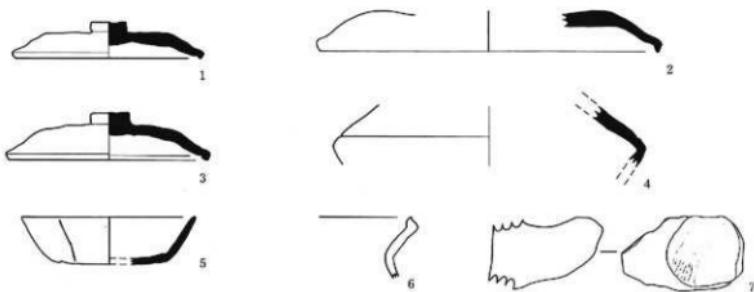


第6図 3地区の遺構(1) (S-1 : 40)

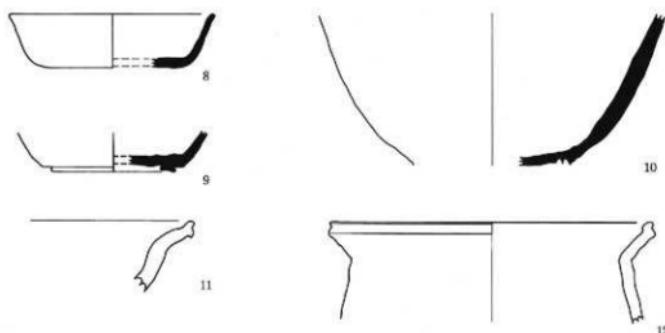


第7図 3地区の遺構(2) (SB01はS=1 : 40、SX01は1 : 10)

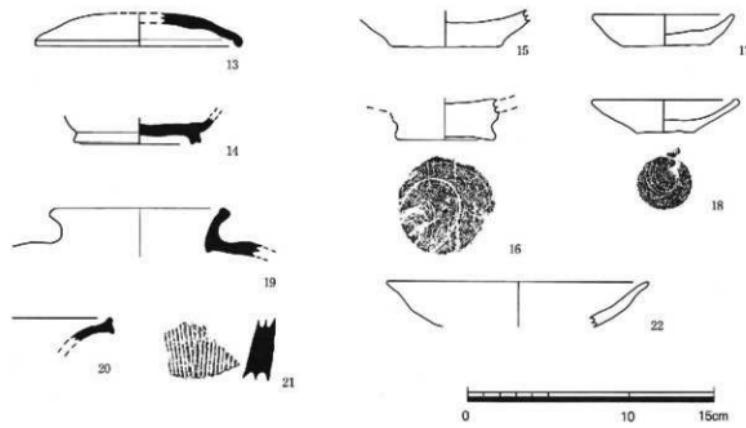
SD01 (1~7)



SD03 (8~12)



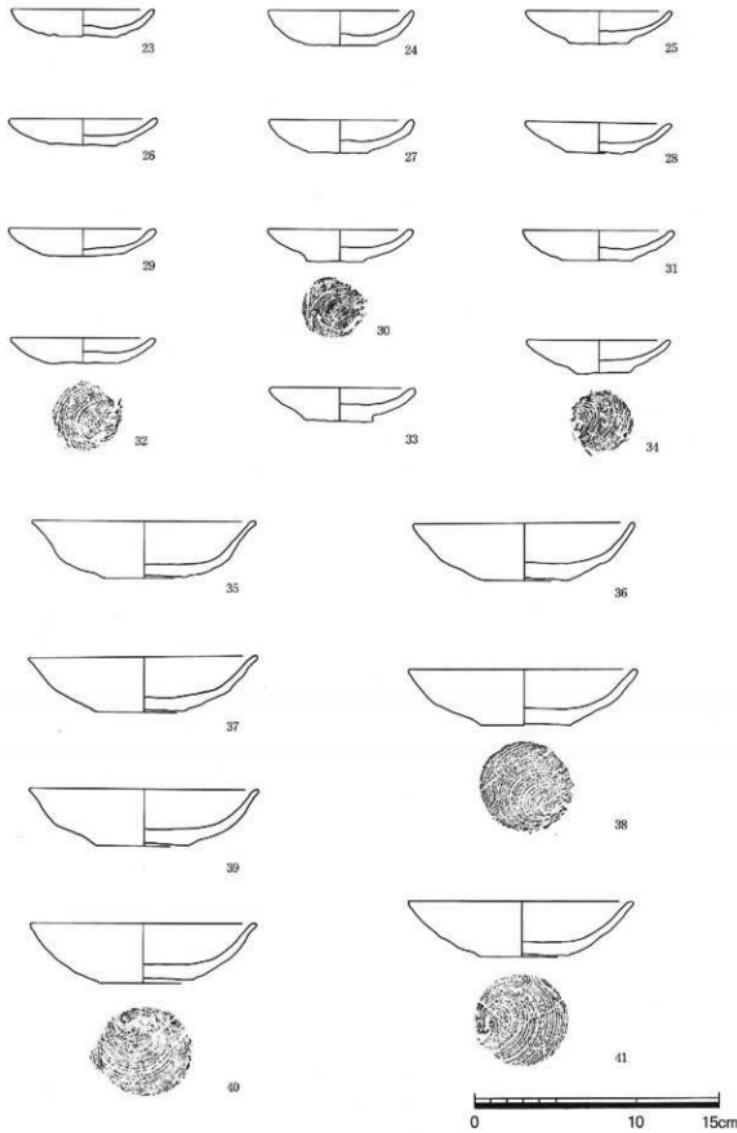
包含層 (13~22)



0 10 15cm

第8図 3地区出土の遺物(1) (S=1:3)

SX01 (23~41)

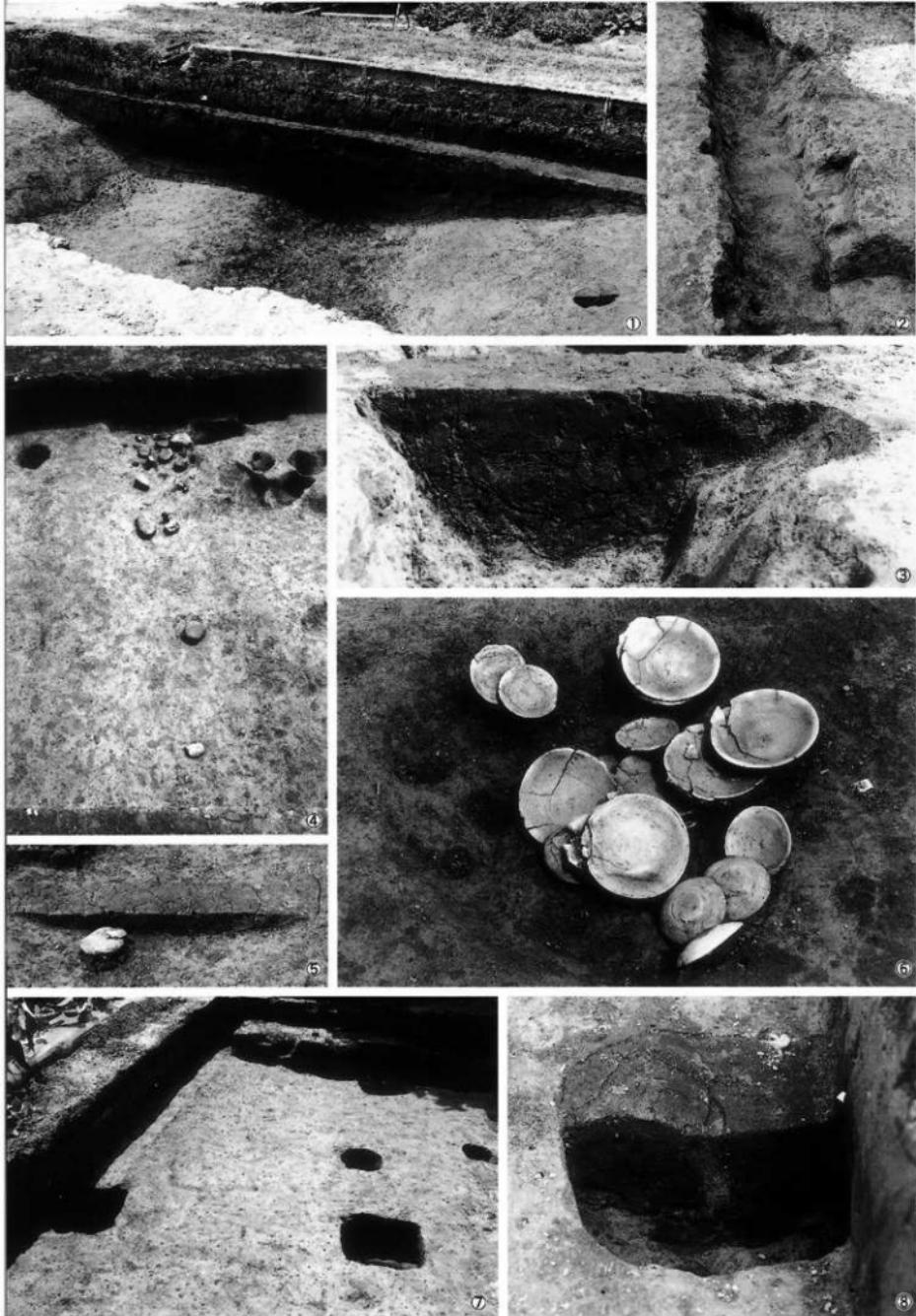


第9図 3地区出土の遺物② (S-1 : 3)



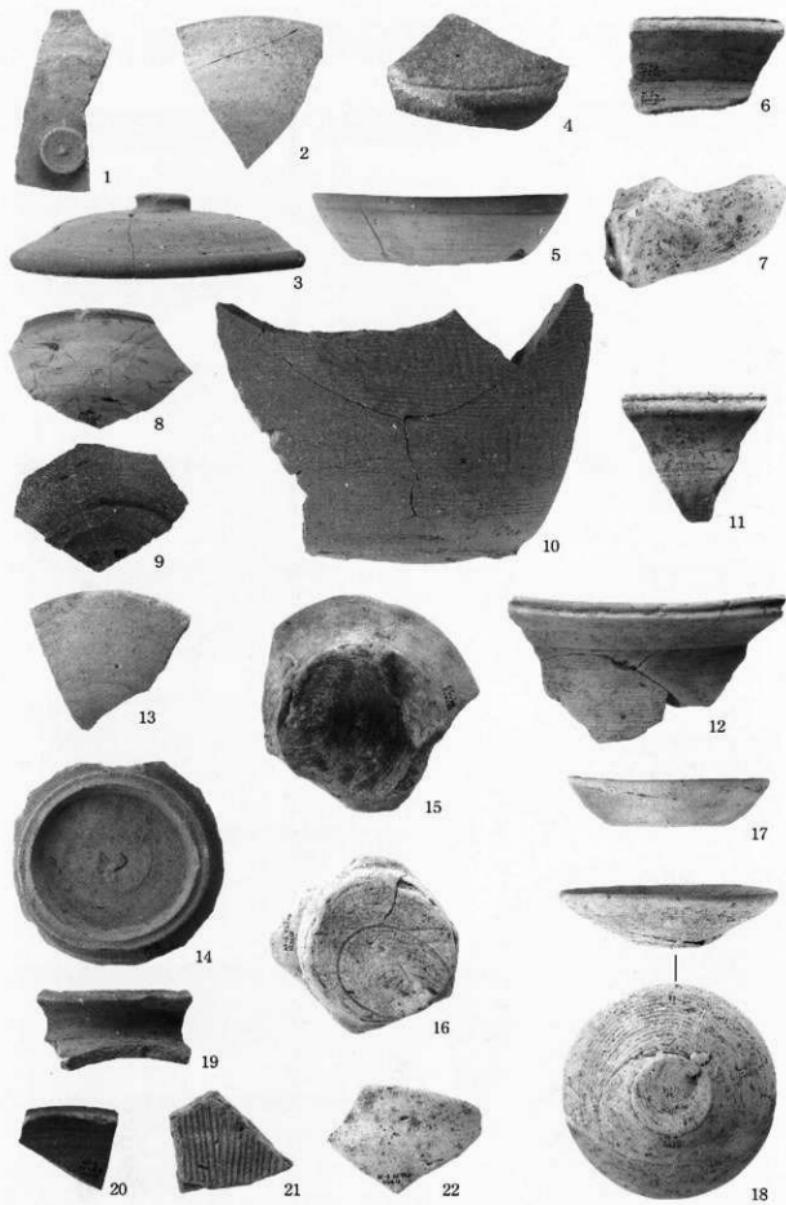
図版1 3地区の遺構(1)

- ① 調査区東側 ② 調査区西側 ③ 調査区全景
④ SX01検出状況 ⑤ 作業状況

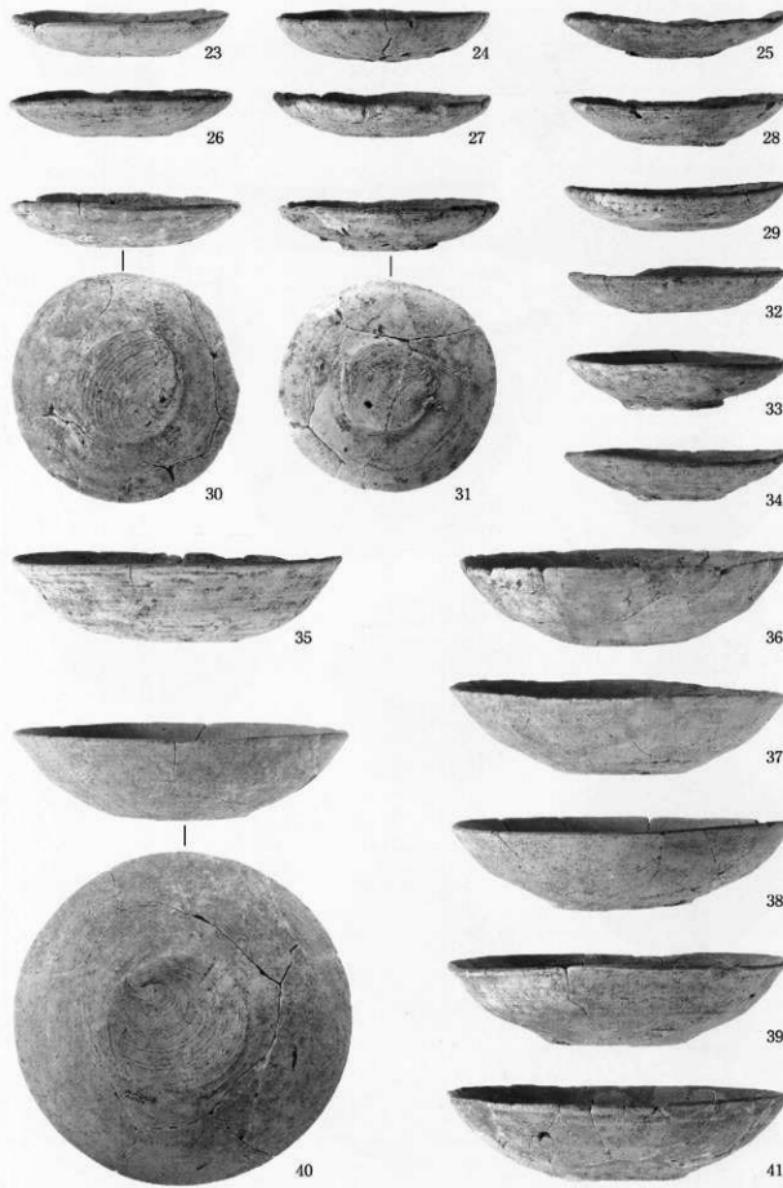


図版2 3地区の遺構(2)

- ① SD01 ② SD02 ③ SD02土層 ④ SD03
- ⑤ SD03土層 ⑥ SX01土器出土状況 ⑦ SB01 ⑧ SB01-P2



図版3 3地区の遺物(1) (S=1:2)



図版4 3地区の遺物(2) ($S=1:2$)

報告書抄録

ふりがな	とやまけんふくみつまちありふさいせきに						
書名	富山県福光町在房遺跡Ⅱ						
副書名	県営は場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)						
編著者名	片田亞紀						
編集機関	福光町教育委員会						
所在地	〒939-1692 富山県西砺波郡福光町荒木1550 TEL (0763)52-1111						
発行年月日	西暦2002年3月8日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
ありふさいじゆ 在房遺跡	とやまけん 富山県 ふくみつまちありふさ 福光町在房	16421	421170	36度35分 53秒	136度54分 38秒	010619 ～010718	305
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
在房遺跡	集落	古墳時代後期 ～古代 古代末～中世	溝 掘立柱建物、土坑、 溝、サク状遺構	土師器、須恵器 土師器、珠洲			

県営は場整備事業（担い手育成型）北山田北部地区
に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告(2)

富山県福光町在房遺跡Ⅱ

平成14年3月

編集 福光町教育委員会

発行 福光町教育委員会

印刷 (株)ナカダ印刷

